「コウナイの石」探訪記２
～その前・その後～

東光部　土井眼科　土　井　治　道

（前回のこの会報に、「コウナイの石」探訪記を記させて頂きましたが、これは、その続編です。）

「コウナイの石」とは、家島町の西島の西の海岸の近くの山の上に有る直径が約８ｍもある卵型の大きな岩のことです。この岩は、谷崎潤一郎の小説「乱菊物語」の中の（海島記）に「天の逆矛」として記載されたものと同じものかと思われます。

本年２月20日、探訪の小旅行に出かけるに当って、その前日まで私は遠足に行く子供のようにウキウキしていました。ところが、その前日、気分は一変しました。この石はオノコロ島の天の御柱であるとする小説「コウナイの石」の著者・上野忠彦先生（元・坊勢島診療所、現・郷里・天草）から一通の手紙が届いたからでした。それには、次のように記してありました。「採石業関係から管理権を持つ真浦財産区（家島）に破砕の許可申請が出された。保護すべし！」と。その夜、冬には珍しい大雨の雨音の為でもありましたが、訳の分からない興奮を覚え、あまり眠れないうちに朝をむかえました。

そして、家島町の西島の「コウナイの石」に行き着いたのは、朝10時頃に飾磨の港を出て、わずかに一時間余り後の事でありました。コウナイの石神さまの姿に接し、安らぎを覚えるとともに、今迄に経験したことの無い奇妙な気が致しました。この時、同行の誰かが思わずヘンな声を上げました。「有馬」と言ったか、「播磨」と言ったか、充分には聞きとれなかったのですが、「ハリャッマ～」と言うような声でありました。

南面・普通の顔の石神
右眼は樹枝状角膜炎？

「コウナイの石」には顔が有ります。正面の顔面は縦に割れ、右眼は樹枝状角膜炎のようでした。これが大いなる誤診（？）と気付いたのは後ほどのことでした。そして、コウナイの石神と別れるその瞬間、私はヘンなことに気が付いたとも思いました。

後日、その時撮影した写真を、我が目を疑いつつ何度も見ました。これ、だまし絵（彫刻）？！見方を変えると、顔面が割れて怒った顔にも、笑い顔にも、そして泣き顔にも、見えるようでは有りませんか？！しかも、泣き顔の右眼は無眼球症・麻痺性下眼瞼外反のようです。皆さんは、どう診断なさいますか？御高診よろしく・・・・

（☞求む往診＝保険請求不可・診療費支払い不能。）

あの時、コウナイの石神は黙して語らずでは有りましたが、別れ際に、私にも「何かをヤレ！」と云って泣いているようにも思えました。何をでしょうか？自然保護？でもない。文化財保護？？そして、私は以前から好きな播磨国風土記を何度も読み返しました。

南西面
やや怒り、南の空を見つめる石神

南西面
右眼を失い泣く石神・下の岩が右眼か？

皆さんご存じだと思いますが、播磨国風土記は奈良時代（715年頃）に書かれた律令時代の公文書。われわれ一般の目に触れるようになったのは、明治時代になってからのことです。この風土記の文語訳本に、眼科医の大先輩、井上通泰先生の「播磨国風土記新考」があります。

@井上通泰は、神崎郡福崎町出身で、柳田国男の次兄です。
県立姫路病院眼科部長（現・姫路赤十字病院）（明治26－28）
第六高等学校医学部眼科学教授（現・岡山大学）（明治28－35）
日本眼科学会創立に関与（明治30）
「播磨国風土記新考」の完稿は、彼が65才の昭和５年のことです。

播磨国風土記の揖保郡の家島の条（現在・飾磨郡家島町）の神嶋伊刀嶋（東）等のところに、興味深いお話しが有ります。

「神嶋は伊刀嶋の東にあります。この島の西の海岸に石神がいます。形が仏像に似ています。この神の顔に五色の玉があり・・・泣いているのは・・・応神天皇の代に新羅からの客が・・・その顔を割って目の玉一つをこじとりました。そのため神は泣いているのです。神は大変怒って暴風を・・・」の記載があります。

播磨国風土記の解釈では、神嶋は上島（家島群島最東端・高砂市沖）とされています。この風土記の記載と、西島（家島群島西端・相生市沖）の「コウナイの神」の、まあヨク似ていること！片目の神様ーー家島に二つ!!不思議なこと！です。［上島には、神嶋伝説の片目の神様が大正時代に現れた？、と云うことです］

今、私はこの二つの石神の真相の解明に狂っています。解明が困難な、家島・石神ミステリー。上島（神嶋）の「人面岩」と、西島の「コウナイの石」。

そして今、コウナイの石神は、採石産業のため文字通り崖っぷちに立たされ、爆破や転落の危機に泣いています。否、そうではないのです。「コウナイの石神」は大量消費の社会を嘆き、私たち現在の人々の未来を嘆き泣いているのです。現代文明による環境破壊が我々人類にどのような結果をもたらすか、まだキミ達には分からないのか！と。

この石神の保存は、もうすでに、手遅れなのかも知れません。しかし、皆で、何とかしなくてはならないのです。小説「コウナイの石」の話では、「コウナイの石」が落ちる時、日本は、日本の社会は沈没するのです。「コウナイの石」は、日本を支える天の御柱なのですから・・・・・

（2000. 4. 1 ［エープリル　フール］記）